

事例から学ぶ

薬剤交付後の患者の状況をもとに 処方医へ情報提供を行った事例

【副作用発現の可能性】

■事例の詳細

70歳代の患者にルセフィ錠2.5mgが初めて処方された。薬剤を交付してから1週間後に患者に電話して状況を確認したところ、患者は指示通り朝食後に服用していたが、口渇と頻尿（夜間4～5回）の訴えがあった。処方医に服薬情報提供書を提出し、他の血糖降下薬への変更を提案した結果、レパグリニド錠0.25mg「サワイ」へ変更になった。

■推定される要因

ルセフィ錠2.5mgによる副作用発現の可能性が考えられた。

■薬局での取り組み

当薬局では、糖尿病治療薬が初めて処方された患者や糖尿病治療薬が変更された患者に対し、交付してから1週間後に電話にて服薬に関するフォローアップを行っている。今後も継続していく。

ルセフィ錠2.5mg/5mgの添付文書（一部抜粋）

8. 重要な基本的注意

8.5 本剤の利尿作用により多尿・頻尿がみられることがある。また、体液量が減少することがあるので、適度な水分補給を行うよう指導し、観察を十分に行うこと。脱水、血圧低下等の異常が認められた場合は、休薬や補液等の適切な処置を行うこと。特に体液量減少を起こしやすい患者（高齢者や利尿剤併用患者等）においては、脱水や糖尿病性ケトアシドーシス、高浸透圧高血糖症候群、脳梗塞を含む血栓・塞栓症等の発現に注意すること。

→この他にも事例が報告されています。

【副作用発現の可能性】

- ◆ 頻尿が続く90歳代の患者にネオキシテープ73.5mgが処方された。薬剤を交付する際、薬剤師は施設職員へネオキシテープ73.5mgの副作用を伝えた。数日後、施設職員から、患者が急に尿閉になったと連絡があった。副作用発現の可能性を疑い、処方医へ情報提供を行った結果、使用を中止するよう指示があった。その後、尿閉の症状は消失した。

【服薬コンプライアンス・アドヒアランスの不良】

- ◆ 喘息の症状がある患者にシムビコートタービュヘイラー30吸入が初めて処方された。デモ品を用いて実演しながら、使用方法や注意点を一通り説明して薬剤を交付した。理解力のある患者であったが、80歳代の高齢者であったため、フォローアップする目的で翌朝に患者宅に電話をかけ使用方法を確認したところ、患者は、シムビコートタービュヘイラー30吸入を吸入した際に口内に粉が入った感じがしなかったため、正しく吸えていないと判断し何度も吸入していた。過量に使用している可能性があったため患者に来局してもらおうと、振戦を認め、血圧100mmHg前後で頻脈があった。すぐにかかりつけ医に連絡し、患者は再受診することになった。

※「共有すべき事例」2021年No.2事例3（一部抜粋）

- ◆ 処方された薬剤を分割調剤して、患者に交付していた。2回目の調剤を行い、薬剤を交付するため患者宅を訪問すると、アドエア125エアゾール120吸入用が未使用のまま残っていた。患者は、1日2回1回2吸入することは理解していたが、たびたび吸入し忘れていたことが分かった。患者に薬剤を継続して使用するためのサポートを行い、処方医には情報提供を行って数量調整を依頼した。

ポイント

- 薬剤の副作用発現をより早く発見するために、薬剤師が患者や家族、訪問看護師・ケアマネジャー・介護施設スタッフなどの他職種に対し、出現する可能性がある副作用の症状をあらかじめ説明しておくことは効果的である。
- 薬剤を使用するうえで必要な説明を薬剤師が患者に適切に行った場合でも、患者によっては実際に薬剤を使用する際に使用方法に不安を感じる、あるいは、指示通りに使用できない状況が起こり得る。薬剤師は、患者が薬剤を適正に使用できるよう、薬剤の交付後も継続して薬剤の使用状況を把握し指導を行う必要がある。
- 薬剤師は、薬剤交付後も継続して患者の体調変化や薬剤の使用状況などの情報を収集し、薬剤の副作用発現の可能性や服薬コンプライアンス・アドヒアランスの不良を発見した場合は速やかに処方医へ情報提供し、必要であれば薬学的知見に基づいた処方提案を行うことが重要である。

